京都遊学期における菅茶山の文人交流について

――詩風の転換を中心に――

黎　小　雨

Kan Chazan's contact with literati during his study tour in Kyoto

—concentrate on the transformation of poetic style

LI Xiaoyu

The poet Kan Chazan（1748-1827）was born in the heyday of the Chinese literature in the Edo period. He went to Kyoto for study six times in his youth. During his study tours in Kyoto, he met and interacted with many literati and scholars, and left abundant materials of epistles and poems. His poetic style greatly influenced by his friends. Especially in the last two study tours, Kan Chazan studied Shushigaku under Naba Rodo and gradually changed his poetic style. And the association of Rai Shunsui（1746-1816）and poets of Naniwa Kontonsha brought him more inspiration of Chinese poetry and the integration of Bunjin thoughts. In this paper, through the investigation of the poetry collection of Kan Chazan's *Koyosekiyo-sonsha Shi*, the letters between him and Rai Sanyo, and the diary of himself *Daini hokujo nikki*, I will find out that how does his social behavior affect his poetic style during his study tours in Kyoto, and analyze reasons of his poetic style's transformation which from Kobunjigaku to the style of Song poetry.

Keyword: Kan Chazan, Naniwa Kontonsha, literati's communication, Song poetry

キーワード：菅茶山、浪華混沌社、文人交遊、宋詩

はじめに

江戸漢文学の最盛期に生まれた菅茶山（1748–1827）は、江戸時代後期を代表する詩人として知られている[1)]。茶山は青年時代に前後合わせて六回京都に遊学した。遊学のなかで多くの文人たちと知り合い、漢詩の交流を含め様々に交友した茶山は資料や書簡を多く残している。彼は遊学の初めに荻生徂徠の古文辞学を学んだが、後に那波魯堂について朱子学を修めた。このように思想主張が変化するのみならず、

1）富士川英郎『菅茶山と頼山陽』（平凡社、1971年）。

詩風も交友が進んむと同時に変化した。特に、最後の京都遊学では頼春水を通して浪華混沌社との交流があり、茶山に漢詩創作と文人思想の再認識に影響をもたらすことになる。

従来、茶山の詩風変化に関する主な研究には福島理子「茶山風の形成――混沌社社友と菅茶山[2)]」、小財陽平「天明年間の菅茶山とその詩風[3)]」などがある。このうち、福島は茶山風の確立に与ったのが南宋の詩風のみとし、それまでの理解に疑問を呈し、「鳥背」という詩語を手がかりとして、混沌社社友との交遊通じた明代文化の享受による茶山詩風の転換を論じた。また、小財陽平は茶山の社会性を帯びた詩作を取り上げて、天明年間の福山藩における自然災害及びそれに伴う百姓一揆に注目し、茶山の諷喩詩の転換を検討した。

このように茶山の詩風に関する先行研究はおおむね時代背景と交遊による詩風転換を論じている。もちろんそれは間違っていないが、茶山の京都遊学期の詩風転換を検討する場合、政治批判詩と風景田園詩という二つの方面における詩風転換も並行して見られるように思われる。一つは田園詩風へと継承される詩風転換、もう一つは後年政治批判詩に至る世情批判詩の詩風転換である。

これらのことを考察するため、本稿では茶山の『黄葉夕陽村舎詩』[4)]（以下『村舎詩』）のほか頼山陽らとの書簡資料、及び茶山本人の自筆日記『第二・北上日記』などの資料を活用して茶山遊学時期の詩風の転換を再検討する。これによって、青年時代の茶山詩風の転換をより明確にし、後の写実的で平明温雅な南宋風の田園詩や政治風刺詩との繋がりを明らかにしたい。

一　菅茶山について

近世漢文学の転換期と呼ばれる天明年間（1781-1789）の激動する社会情勢と軌を一にして、漢詩文の世界でも新たな詩風を求める動きが現れ始めた。菅茶山はその中でもひときわ輝きを放つ漢詩人であった。菅茶山、名は晋帥（ときのり）、字は礼卿、通称太中、茶山はその号である。延享五年（1748）に備後神辺に生まれ、青年時期に京都に遊学、帰郷して私塾黄葉夕陽村舎を開設した。その後、村舎は福山藩の郷塾となったとき、名を廉塾に改めた。享和元年（1801）、福山藩の儒官に任命され、藩校弘道館にも出講する。詩集に『黄葉夕陽村舎詩』前編・後編・遺稿がある。

茶山が青年時代、六回京都に遊学したことがよく知られている。最初の京都遊学は十九歳の時であり、三十三歳までの十数年間に六度上洛している。茶山の交友関係は非常に広く、漢詩人はもちろん、僧侶、藩儒、医者などさまざまな階層の人々が含まれる。その中の多くの人々は六度の上洛時に知り合った人であり、茶山の生涯や文学観に多大な影響を与えたと考えられる。ここで注目したいのは、茶山の「詩風」は一体どのように転換したのかである。

茶山漢詩の詩風は、のどかな農村風景を日常親近な言葉で綴った田園詩にあると言われ、そのことは

2）福島理子「茶山風の形成――混沌社社友と菅茶山」、『近世文芸』第51期（1989年）。

3）小財陽平「天明年間の菅茶山とその詩風」、『明治大学教養論集』500号（2014年）。

4）以後引用する茶山詩については、富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詩集　日本漢詩』第九巻（汲古書院、1985年）による。

彼に関する詩評からも見られる。たとえば富士川英郎は次のように要約している。

> 『黄葉夕陽村舎詩』前編・後編・遺稿、併せて二十七巻は、『山陽詩鈔』とともに江戸時代において最も読まれた詩集であるが、詩材をを身近な日常生活のうちに求め、平明な言葉を以て、実景を写し、実感を歌うことによって、寛政以後の詩壇に大きな変革をもたらした茶山の詩の全貌がここに見出されるのである[5)]。

また、佐藤保氏は次のようにいう。

> 詩は宋詩を学ぶ当時の風潮を受けつぎ、その第一人者と目されたが、興趣がわからねば作らず、写実を尊び虚飾仮構は排斥した。…（中略）…農村の自然を鋭敏な感覚で詠じた茶山の詩は多くの人々に愛好された[6)]。

このように茶山の詩作を評価する際、必ず「宋詩風」「写実的」「田園詩人」などの言葉が出てくるが、以下に検討するように、その詩は初めから「宋詩風」なのではなかった。

二　京都の交遊および朱子学への転向

茶山の六回にわたる京都遊学については『村舎詩』前編巻一に収められている「歳杪放歌」と「今井子原宅集，同葛子琴，篠安道，頼千秋，小西伯熙及桑田子重，藤枝得中，萱野雄飛賦所得寒韻」に次のように自述されている（以下、後者に関しては詩原文の一部分を掲げる）。

歳杪放歌

三十二年胡忿忿	三十二年　胡ぞ忿忿たる、
単身千里六向東	単身千里　六たび東に向ふ。
満腔慷慨成底事	満腔の慷慨　底事をか成す、
負郭田園半為空	負郭の田園も半ば空と為る。
唯有風月供多病	唯風月の多病に供する有るのみ、
今年又尽伏枕中	今年も又尽く　伏枕の中。
屠龍無用已知之	屠龍の無用なるは　已に之を知り、
一寒如此于我宜	一寒此の如きも　我に於ては宜なり。
堪喜阿連麤識字	喜ぶに堪へたり　阿連の麤くも字を識るを、
尊前唱和餞歳詩	尊前に唱和す　餞歳の詩。

5）注４前掲、富士川英郎他編『詩集日本詩集』第九巻解題参照。

6）『日本古典文学大辞典』第二巻「菅茶山」項（岩波書店、1984年）。

今井子原宅集，同葛子琴，篠安道，頼千秋，小西伯熙及桑田子重，藤枝得中，萱野雄飛賦所得寒韻

吾本性癖懐微志　　吾本性僻　微志を懐く、

負笈六度到平安　　笈を負うて六度平安に到り。

千場結客交頗汎　　千場客を結んで　交頗る汎し、

朝市盟好猶未寒　　朝市盟好　猶お未だ寒からず。

「歳杪放歌」は安永八年（1779）暮、三十二歳の作である。首聯の「三十二年胡忽忽，単身千里六向東」（忽の正字は悤、あわただしいの意味）の意味は「三十二年があっという間に過ぎてしまった、単身遊学のために京都へ六度も上った」。三十三歳に最後の遊学を終えたことからすると、この「六向東」は最後の遊学時期を指している。また、二首目の詩題に挙げられた人々は浪華混沌社の詩人たちであり、宴会に招待された茶山は詩会の日を重ねた。混沌社の人と交友し始めたのは最後の遊学期であるため、この詩もその時の作であると思われる。ここで六回京都遊学の時期をまとめると次のようになる。

第一期　明和三年（1766）19歳。

第二期　明和五年（1768）21歳。

第三期　明和七年（1770）23歳。

第四期　安永元年（1772）～安永三年（1774）25歳から27歳まで。

第五期　安永六年（1777）30歳。

第六期　安永九年（1780）33歳。

さて次に、前五回の遊学事情をふまえて、田園風景詩の詩風転換を考察してみよう。

第一回の遊学は明和三年（1766）である。この時のことを頼山陽「菅茶山先生行状[7]」「（先生）年十九、遊京師、从市川某、学所謂古文辞者」（先生年十九にして、京師に遊び、市川某に従ひて、謂う所の古文辞なる者を学ぶ）と伝えている。市川某という人物は未詳だが、一説によると、大内熊耳（荻生徂徠の門下）の弟子市川鶴明ではないかという[8]。周知のように、徂徠は「古語に熟達し人情に通暁することが必要で、そのためには自ら古語を用いて詩文の実作に努めねばならない[9]」と表現重視の詩論を主張した。そこから盛唐詩摸倣の擬古主義が生まれる。しかし、行き過ぎた擬古は叙情を阻害するという矛盾を含んでいた。盛唐詩に典拠のない語は用いないという表現尊重の擬古主義は、形式主義に陥りかねない。しかし、当時流行していた古文辞派を学んだ茶山は古文辞派の文人たちと交友した。この交友を通じて、茶山の風景田園詩風も徂徠学派の擬古主義に大きく影響されたと考えられる。

第二回と第三回の京都遊学は明和五年（1768）と明和七年（1770）である。資料[10]によると、茶山が

7）五弓雪窓『事実文編』三－四八（関西大学東西学術研究所編、1979年）284-285頁。

8）西原千代『菅茶山』（白帝社、2010年）19頁。

9）富士川英郎他編『詩集　日本漢詩』第三巻（汲古書院、1985年）256頁。

10）富士川英郎編『富士川遊著作集』第八巻「芸備医人伝」の「菅茶山」の項（思文閣、1980年）。

最初遊学を志したのは「古文辞学」と「医学」を学ぶためであった。『師談録』[11]（江戸末期の眼科医、土生玄碩の口述を門弟の水野慶善が筆記した書物）の中で、土生玄碩が「遂従和田先生爲醫。余入先生門時、已茶山帰郷」（遂に和田先生〔東郭〕に従ひ医と為る。余が先生の門に入りし時、已に茶山は郷に帰れり）といっていることからそう考えられる。このほか、明和七年に茶山は池大雅と知り合った。茶山は四回目の遊学期から那波魯堂の門下に入っている。年表[12]によると、茶山は明和八年（1771）の初春に西山拙斎と出会い、三原に梅の花を見に行った。その時、拙斎は茶山に古文辞学と濂洛の学の話をしたようである[13]。拙斎は初対面の茶山に古文辞学の否を説き、濂洛の是を述べて学問の転換を勧めたのではなかろうか。茶山が書いた「拙斎先生行状」に次のように説明されている。

> 魯堂學、初信護園、後頗覺其語多矛盾、文字亦多敗闕、幡然猛省、更取程朱諸公書、従容潛玩、有會於心。
> （魯堂の学、初め護園を信ぜしも、後ち頗る其の語に矛盾多く、文字も亦敗闕多きを覚り、幡然として猛省し、更めて程朱諸公の書を取り、従容潜玩して、心に会するところ有り。）

すなわち、魯堂は初め徂徠学を学んでいたが、その説に矛盾があることに気づき、文章にも欠点が多いので、反省して程朱の書物を取り、じっくりと読んでいくうちに会得するところがあった。また、茶山は安永二年（1773）の春に初めて頼春水の新居「春水南軒」を訪ねている。それは『春水遺稿』[14]に寄せた茶山の序文からわかるのであって、そこに「余之初見時、先生年二十八、余則少二年」（余の初めて見えし時、先生（春水）は年二十八、余は則ち少きこと二年）という。春水との出会いは後に浪華混沌社との交遊に対して、きわめて重要な意味を持つことになる。

三　南宗画と明代の文人文化の受容

最初の遊学の明和三年（1766）から最後の遊学の安永九年（1780）まで十五年の年月が経った。この長い年月の間、茶山は詩作を多く残したと考えられる。『村舎詩』の巻一凡例に、「第一巻係癸卯以前所作、原稿罹災、僅餘一本、仍舊分體」とある通り、第一巻は「癸卯」すなわち天明三年（1783）以前の作であり、時期的にはちょうど遊学を繰り返していた時期に当たる。しかしながら、文化四年（1807）（六十歳）二月十八日の神辺大火で茶山の家は全焼し、若い時の作品はこの時焼失したらしく、二十代の作品として現在わかっているのは「花月吟」[15]と二十五歳の時の作と思われる「江洲」[16]七言律詩二首、

11）富士川游他編『杏林叢書』上巻（思文閣、1971年）。
12）注１前掲、富士川英郎『菅茶山と頼山陽』付録。
13）注８前掲、西原千代『菅茶山』29頁。
14）頼春水著『春水遺稿』（頼山陽編、聖華房、1828年）。
15）注４前掲、富士川英郎他編『詩集日本詩集』第九巻、303-313頁。
16）『黄葉夕陽村舎詩』前編巻一所収。

安永四年（1775）二十八歳の頃の作といわれている五言古詩「寄紀州西山子絅」[17] ぐらいである。

「花月吟」に関しては、上にも触れた『師談録』に、次のような一節がある。茶山が和田東郭の門に入っていた頃のエピソードを伝えたものである。「（茶山）嘗賦月梅詩各二十律、示之和田先生。先生、示之村瀬栲亭。栲亭嗟歎曰、雖宿儒不可及也。時年二十五六耳」（（茶山）嘗て月梅詩各二十律を賦して、之を和田先生に示す。先生、之を村瀬栲亭に示す。栲亭、嗟歎して曰く、宿儒と雖も及ぶべからざるなり。時に年二十五六なるのみ）と。この「月梅詩各二十律」はどのような詩であったのか。富士川英郎は「花月吟」二十首かと推測している[18]。史料は不十分だが、富士川の推測が正しければ、「花月吟」は茶山二十代、京都遊学時期に作られたことになる。そうであれば、遊学初期（遊学四回目）の茶山漢詩詩風の考察資料として使うことができる。

茶山本人は「題花月吟」（花月吟後に題す）で以下のように述べている。「花月吟二十首、余少年時、傚唐伯虎所作。以纖靡似時様、棄而不録[19]」（花月吟二十首は、余が少年の時、唐伯虎に倣ひて作る所。纖靡にして時様に似たるを以て、棄てて録せず）。ここにいう唐伯虎とは明の文人唐寅（1470-1524）のことで、花月吟十一首がある。その時代の傾向に合わせて「花月吟」を作ったが、のちのみずからが理想とした詩風と相違し、「纖靡」であったため、茶山自身はその詩集（『村舎詩』）のうちに収めなかったという。この「花月吟」は、各句に必ず「花」「月」の二字を詠みこむ、極めて技巧的な七言律詩の連作である。ここでは、「花月吟」に見られる文人交流による南宗画と明文人文化の受容を見てみよう。

1　池大雅と南宗画

前章に触れたように、明和七年（1770）、二十三歳の茶山は池大雅と知り合った。池大雅は茶山の田園詩風に刺激を与えた一人であったようである。当時茶山は、池大雅と頻繁に行き来している。そのことは『村舎詩』巻四に収められる「題大雅書軸匣」の中の回想によって知られる。

> 余在京時、與飯田玄泉者善、玄泉學書畫於池大雅。每與余出游、輒過其盧。余亦因與大雅相識。一日、玄泉、誇示大雅畫天門山圖。上題李白詩。余愛其畫、而病其詩及落書草書太狂。乃乞大雅、別作一圖、而楷書其名、不題其詩、持三紙附之。數日過其盧。畫已成、出授。其一畫竹石、一蘭石、一則此圖也。熟視其石腹、隱隱見山皺。意方其下筆、墨或不受意、塗抹爲石、加以蘭竹者耳。…余時年二十三、大雅五十左右、距今四十八年矣。…時文政紀元嘉平月也。
>
> （余、京に有りし時、飯田玄泉なる者と善し。玄泉、画を池大雅に学ぶ。余と出游する毎に、輒ち其の盧を過ぎる。余も亦因りて大雅と相識る。一日、玄泉、大雅の書ける天門山の図を誇示す。上に李白の詩を題す。余　其の画を愛するも、而も其の詩及び落款の草書の太だ狂なるを病む。乃ち大雅に別に一図を作り、且つ其の名を楷書して、その詩を題せざらんことを乞ひ、三紙を持して、之に附す。数日にして其の盧を過ぎる。画已に成り、出して授く。其一は竹石を画き、一は蘭石、一

17）『黄葉夕陽村舎詩』前編巻一所収。

18）富士川英郎『菅茶山』上（福武書店、1990年）31頁。

19）注４前掲、富士川英郎他編『詩集日本詩集』第九巻、311頁

は則ち此の図なり。其の石腹を熟視するに、隠隠として山皺を見る。意ふに其の筆を下すに方り、墨或いは意を受けず、塗抹して石と為し、加ふるに蘭竹なる者を以てするのみ。…余　時に年二十三、大雅は五十左右、今を距たること四十八年なり。…時に文政紀元嘉平の月なり。）

この引用から知られるように、池大雅を茶山に紹介したのは京都で名医として知られた飯田棟隆の長子、飯田玄泉であった。茶山は池大雅の画を好み、その文人画を高く評価した。唐寅に私淑し南宗画を治めた大雅が文人画の大成者とされていることはいうまでもないが、当時日本に伝来された南宗画を享受する社会風潮も考慮する必要がある。明和初年（1764）、明文人の書画が中国からもたされ、いわゆる「文人趣味」の流行の兆しが見え始めていた。のちに浪華混沌社との交遊時に南宗画に触れる機会もあるが、それに先立つこと十年の三回目の遊学期にすでに南宗画と関わっていたことは注意が必要である。

2　混沌社と明代の文人文化

混沌社が結社されたのは明和初年（1764）のことである。上にも触れたように、当時は「文人趣味」が流行し、文徵明、唐寅の書画が人々に享受された。一方、池大雅、与謝蕪村をはじめ、明清画壇の影響のもと、日本の画人による「文人画」が大成される。その中で、木村蒹葭堂は混沌社の盟友として自ら収蔵した書画の名品などを盟友たちに鑑賞させたであろう[20]。このように、混沌社員らは明清人の書画作品に接触することができ、明清の文人文化を享受した。混沌社の詩人葛子琴に次の詩句がある[21]。

朱明錢氏爲誰筆　　朱明銭氏誰が為にか筆す、
字畫本稱衡山亞　　字画本称す衡山の亞と。

これは懐徳堂の雅会で銭叔宝の書を観たときのものである。「朱明」は明朝の意味であり、「衡山」は明代の文人文征明のことを指している。葛子琴の文人趣味の一端が窺える。

南宗画に惹かれた彼らは新しい美的インスピレーションを得て、南宗画によく描かれるモチーフを詩語として使うようになった。南宗画の流行とともに題画詩も盛んに作られるようになる。茶山や山陽とも関わりのあった田能村竹田の『山中人饒舌』に「近日、題畫詩。學宋元及明人唐祝輩。頗得其趣」（近日の題画詩、宋元及び明人唐祝の輩を学びて、頗る其の趣を得たり）と記す通り、唐寅、祝允明らの詩が模範と見なされていた。

混沌社の詩人たちは彼ら明文人の詩を取り入れ、新風開拓の基礎としていた。他に明和六年（1771）八月刊『浪華名流花月吟』の集団的な創作活動も文人文化の受容の一つの形ともいえる。これは葛子琴、頼春水、鳥山崧岳ら混沌社員十二名がそれぞれ十首を作り、最後に合作を試したもので、このように明文人詩の受容はまもなく他の詩人達にも伝わっていた。彼らの催した「花月吟」の詩会は諸詩人の興味を掻き立てたらしく、『與樂園叢書』巻十には平井聴雨の賦した「花月吟十首　遙同浪花諸友擬唐寅作」

20）注２前掲、福島理子「茶山風の形成――混沌社社友と菅茶山」24-34頁。
21）「冬夜懐徳堂集。 観銭叔寶書画楽志論圖引」『葛子琴詩鈔』巻二所収。

を見ることができる。おそらく「花月吟」の賦作は詩文の先端を行く試みと諸詩人に受け取られたのであろう。前述した通り、茶山もまた同じく「花月吟」二十首を作り、それを手にして頼春水の元を訪ねたことが安永九年正月晦日付の頼春水書簡（頼春風・杏坪宛）に記されている。

礼卿ハ作者ニて候、花月吟二十首持参、其佗作も有之候、皆々渾雅之作共ニ候、西山も同しく見申候、両傑出ノ人物と存候。

安永九年（1780）は茶山と混沌社員との親交が結ばれた年であるが、明和七年（1770）の遊学三回目の頃に、二十代の茶山はすでに浪華混沌社の文学創作に影響されて「花月吟」を作っていたのである。安永九年の交遊六回目に浪華混沌社と交遊し始め、かつて二十代に作った「花月吟」を頼春水に渡したことになる。茶山は混沌社が受容した明文人文化の試みに共感し、これを意識しつつ詩作したと考えられる。

では、大雅の芸術観や混沌社の明文人文化受容は茶山の初期詩風に刺激を与えたといえるのであろうか。ここでは茶山の作った「花月吟」のどのような点が「以纖靡似時様」であるのかを見てみよう。茶山の「花月吟」二十首のうち、前二首は初春の様子を詠んでいる。三首目から十五首目は春蘭の時期を詠み、十六首目から最後までは晩春の様子を詠んでいる。初春、春蘭、晩春時期のそれぞれ三首を取り上げて考察する。

花月吟　寄平安故人倣唐伯虎體

第一首　一春花月動相睽　　一春の花月　動もすれば　相睽く、
何夜花梢見月棲　　何れの夜か　花梢　月の棲ふを見ん。
吟月遅花寒剪剪　　月に吟して花を遅ちては　寒　剪剪たり、
坐花望月雨凄凄　　花に坐して月を望めば　雨　凄凄たり。
月中私擬催花詔　　月中　私に擬す　花を催すの詔、
花上誰懸取月梯　　花上　誰か懸けん　月を取るの梯。
願得花園常貯月　　願はくは　花園　常に月を貯へ、
花朋月侶毎招携　　花の朋　月の侶　毎に招携するを得ん。

頸聯の「吟月遅花寒剪剪　坐花望月雨凄凄」についていうと、「剪剪」は冷たい風の吹く様で、寒さの中で月を賞翫するものの花は寒さに負けて咲かないとうたう。一方、「凄凄」は寒さが身に染みる様子をいい、花の咲く夜に雨が冷めたく降り、月だ出るのを望んでも叶わない。早春の寒さの中で月も花も鑑賞にたえない様子を詠んでいる。尾聯の「願得花園常貯月 花朋月侶毎招携」は茶山の願望を述べ、花と月が常に一緒に出ることを願い、花の朋と月の侶をいつも招待したいと詠んでいる。茶山は「花と月」は切り離せない関係であり、「花」と「月」を「自分」と「友人」に喩えている。

第十一首　花筵月席莫辭頻　　花筵　月席　頻りなるを辭する莫れ、

月思花情正晩春　　月思　花情　正に晩春。
好取花前吟月客　　好取す　花前　月に吟ずる客、
生憎月下拗花人　　生憎し　月下　花を拗する人。
移牀月地花添態　　牀を月地に移せば　花は態を添へ、
植杖花堤月轉親　　杖を花堤に植つれば　月　転た親しむ。
多少憐花憐月者　　多少ぞ花を憐れみ　月を憐れむ者、
不知花月爲誰新　　知らず　花月　誰が為に新たなるを。

これは晩春時期におけるの花月の宴会を詠たもので、首聯では花と月の宴会が頻繁に行われているが辞退しないでほしいという情を述べる。頷聯では月を詠ずる客が好きだと述べ、逆に、月下の花を折る人が憎いとうたう。頸聯では、茶山自身を花と月の仲間に入れ、花・月・（人）自分の三要素を晩春の宴会の中に置き、バランスの抜群さを美しい風景の中に点綴している。尾聯では、花と月を憐れむ者の多くは、花と月が誰の為に新たになるのかを知らないと風刺し、その自然摂理による美しさを頌えている。

第十八首　誰令花月長幽盟　　誰か花月にして　長く幽盟ならしむ、
月色増輝花亦榮　　月色　輝きを増し　花も亦栄ゆ。
月是好賓花好主　　月は是れ好賓　花は好主、
花眞難弟月難兄　　花　真に弟たり難く　月　兄たり難し。
月中堪挹花芳意　　月中　挹むに堪へたり　花の芳意、
花下深知月潔情　　花下　深く知る　月の潔情。
月既招吾入花社　　月は既に吾を招きて花の社に入らしむ、
好隨花月送斯生　　好し　花月に随ひて斯の生を送らん。

頸聯の「挹」は酌むの意味である。この詩において、茶山は再び花と月の切り離せない関係をうたう。誰が花と月に長く盟友の関係を結ばせたのだろうか。月光が輝きを増せば、花もまた盛んに咲きほこる。月は花の賓客、花は月の主人で、主客のように親しい。月の招きに応じて花の社に入った私は、これからの人生は花と月の友として過ごそう。

以上の三首からわかるように、茶山は花月と自分を一体化し、親密な関係に比擬した。時には「主」と「客」の間柄であり、時には友人の親しい関係に喩える。自分を月と花の仲間とし、人と景色の絶妙な組み合わせを強調する。茶山は、自然を代表する花と月をあたかも有情の人のように詠み、ロマンチックな発想で「花月吟」二十首を作った。詩作の時期を考えると、茶山は京都での交遊のさまを思い、花月鑑賞の宴会を美しく記録した。

これらの詩の優れた点は現実にその光景を目の当たりにしている臨場感を読者に与えることであろう。もちろん詩語の選択に繊細な感覚はあるが、単に観念で作られた作とはいえない。「以纖靡似時様、棄而不録」の自評はやや厳しいのではなかろうか。茶山後期の宋詩風田園詩と比較すると、習作に近いが、かえってそれが美しい風景をもって読者に迫ってくるように思える。従来の擬古主義が主張する詩語の

重視とは違う風趣が見え、内容も真実味を込めつつ工夫を凝らしていたと考えられる。

四　浪華混沌社との交遊

1　交遊の事情

古文辞学にともなう「盛唐詩」の擬古主義は江戸後期の漢詩の自由創作には不利となったが、思想的に朱子学に転じた茶山は一気に詩風を変えたのであろうか。それを検討する前に、茶山最後の遊学の経過を確認しておきたい。五回目までと違って六回目の遊学では、交友範囲は広くなり、特に浪華混沌社盟友たちとの交わりが茶山にとって貴重な人生経歴となった。茶山は『村舎詩』巻三の「篠安道遺稿序」[22] に次のように記している。

> 余屢東游、勝會頗多。其最不能忘者、爲浪華混沌社。同盟三嶋子琴諸子、凡二十名。別有竹山兄弟及合麗王輩。其人則疊壁連珠、其文酒過从之盛、于花于月率无虚日。庚子之游、頗與其筵。自謂、生與諸子同時、何幸如焉。
> （余屢ば東游し、勝会頗る多し。其の最も忘る能はざるは、浪華の混沌社為り。同盟は三嶋（篠崎安道）、子琴の諸子、凡二十名。別に竹山兄弟（中井竹山・履軒）及び合麗王（細合斗南）輩有り。其の人は則ち叠壁連珠、其の文酒過從の盛んなる、花に月に率ね虚日無し。庚子の游、頻りにその筵に与る。自ら謂へらく、生まれて諸子と時を同じくす、何の幸焉に如かん。）

このように、茶山は混沌社同人たちとの交遊を「其最不能忘者」と述べ、貴重な思い出として重視している。「其人則疊壁連珠、其文酒過从之盛、于花于月率无虚日」の語からは文人交遊の賑やかな様子も窺える。

以下にとりあげる茶山の安永九年『第二・北上日記』はおそらく最後の遊学期の記録で、拙斎を追って京都遊学したときの日記の後半部であるといわれる[23]。それは上洛後一か月半以上経った安永九年（1780）二月二十五日、京都から出発して浪華（大坂）に行くところから始まっている。『第二・北上日記』の内容は次のように分けることができる。

①二月二十五日から三月三日　京都から浪華へ
②三月四日から四月二十七日　京都滞在
③四月二十八日から五月十二日　浪華滞在
④五月十二日から五月十六日　出港を待つ
⑤五月十七日から五月二十日　帰途の舟中

22）『黄葉夕陽村舎詩』巻三所収。
23）頼祺一「菅茶山の安永九年「北上日記」」を参照、『広島大学文学部紀要 』32、1973年24-46頁。

その記事を見ると、同年三月三日まで京都の春水宅に泊まり、春水の紹介で池田の荒木商山を訪ね、またその途中で葛子琴と初めて出会った。ここで、その幾日分かを取り上げて交遊の事情を検討する。

（二月）二十八日　余訪商山於池田、千秋命桑田元厚爲導、且題詩于扇摺貽余以爲介。其詩云、二月梅花落古津、吟筇将問李溪春、相逢合若旧相識、本是烟霞同病人。李溪乃商山別号云。午前出浪華、街上与子琴遇。（中略）商山爲人沈重寡言、談話如此平生之所罕有嘗聞之千秋、命飯及酒、余請主人勒韻、遂約次千秋扇面韻、余得二首。

商山席上同次千秋韻
久見詩名満摂津　吾行荳止討芳春
尊前休説新知楽　十載魂交是故人
白俗元軽動馳誉　桃嬌柳媚各争春
如今同調求難得　遙訪雲林晦迹人

元厚得一首、主人二首、主人云詩甚不得意、請勿持稿去、然以余観之、雖不似他日之作、亦不如余輩俚語押韻者之比、其老錬不苟於是益見焉、談話及三更而臥。

二月二十八日の日記のように、茶山は交遊の場で作った詩をしばしば記録している。このような詩作は、詩酒の会で詠まれた作と交遊中の所聞所見を記述した作である。その後、京都に帰り、聖護院村の住まいを中心に、拙斎、中山子幹、佐々木良斎らと『周易』や『論語』の会講を開いたり、魯堂を取り巻く聖護院近辺の文人、学者との交際、洛中諸寺院の見物に没頭していたようである。例として、四月七日の日記を引用する。

（四月）七日　子雅・子幹・良斎及余会講周易本義、将開席會、奥田珉川至、酒談數刻遂輟、有花片爲風所飄入窓隙、珉川賦絶句詩余次韻
妍日微風百卉辰　何妨携酒伴遊人
春風有意君看取　休道花飛減却春
夜与子雅至万茂氏宿焉、送一道師也。

これによると、茶山たちは『周易』の會講を開く直前に奥田岷川が来たため、会講を取りやめ、しばらく酒を酌みかわした。すると、風に吹かれて窓際に漂ってきた花びらを奥田が七絶を作った。このように交遊の日々の様子が生き生きと描かれていて、壮気の充実した茶山の姿を窺うことができる。

日記は二月二十五日から五月二十日まで一日も欠けることなく記されているが、注目したいの浪華混沌社との交遊部分である。四月二十八日から五月十二日までの十数日間、茶山は多く大坂にいた。頼春水の私塾である青山社に宿泊し、別宅を持っていた小西伯熙の招待や、混沌社友の厚意で連日連夜詩酒の會に招かれ、一生忘れがたい思い出を作った。明和・安永期に最盛期を迎えていた混沌社の社友はいずれも知名度の高い文人であり、文学・思想上の交流は茶山に多大な影響を与えたと思われる。

2　混沌社の詩風について

『春水遺稿』[24] 巻十一に「余在浪華、文墨之交不乏、其人詩社、號混沌（中略）言曰、遊必可文、遊而不文不如無遊。故其相會集、輙必賦詩。其詩晴雨寒暄、人事曲折、寫實爲主」（余、浪華に在りて文墨の交わり乏しからず。其の人の詩社、混沌と号す（中略）。言ひて曰く、遊びには必ず文あるべし。遊びて文あらざるは遊び無きに如かず。故に其れ相会し集へば轍ち必ず詩を賦す。其の詩、晴雨寒暄、人事曲折、写実を主と為す）と述べられている。ここにいう混沌社の文学および漢詩創作に対する精神は、のちの茶山の「写実風」とぴったり一致している。

茶山の「花月吟」は前述した通り、習作の領域を出ないが、この詩が作られたのは混沌社と交遊する前のことで、茶山の詩風はすでに盛唐詩の擬古主義から離れ、実際の経験に基づいて詩情を述べていたのである。その後、三十三歳になったちゃざんは混沌社の会に参加してさらに明清の書画に触れ、混沌社員と同様に明の文人文化の影響を受け、それが詩風の転換にもつながったことになる。

茶山の『村舎詩』巻一に次の詩がある。

發河邊驛

沙嘴寒輕近午風　　沙嘴寒さ軽し午に近き風
招招舟子柳烟中　　招招たる舟子柳烟の中
一篙新水春猶浅　　一篙の新水春猶ほ浅し
知是松山雪未融　　知る是れ松山雪未だ融けざるを

これを六如は「清婉似文衡山」と評している。文衡山は文徵明のことである。同じく巻一に次の詩がある。

病中旦秋

層巒疊巘勢朝東　　層巒 叠巘して 勢 東に朝ふ
茅屋人依桂樹叢　　茅屋 人 桂樹の叢に依る
秖欲賣文供菽水　　秖だ文を賣りて菽水を供さんと欲す
猶堪奠枕傲王公　　猶ほ枕を奠きて王公に傲るに堪へたり
山城雨過飛禽外　　山城 雨過ぎて 飛禽の外
海國秋生臥病中　　海国 秋生じて 臥病の中
閑使児曹誦陶集　　閑に 児曹 陶集を誦せしむ
簾帷綷繚暮林風　　簾帷 綷繚したり 暮林風に

これを頼春水は「前聯似元、後聯似明」と評した[25]。これらは、茶山自身が文徵明の詩作や元明の詩を意

24）注14前掲、頼春水著『春水遺稿』（頼山陽編、聖華房、1828年）。
25）『黄葉夕陽村舎詩』本文欄外に六如と頼春水などが付した詩評。

識していたかどうかはともかく、六如や春水ら他者から見て文徴明の詩にきわめて近いものであったことを物語っている。

こうした茶山の南宗画、明文人詩への接近はやはり混沌社友との交流の賜物であった。混沌社員らとの交遊や詩会に誘われた茶山は南宗画の柔らかい筆法、夕陽・鳥・雲などの山水画モチーフ、南宗画がもたらした美意識の構造をその詩心の深いで受け入れたと思われる。

3　混沌社と宋詩風

明文人文化と南宗画の受容の面で漢詩創作に斬新な示唆を与えてくれた浪華混沌社だが、果たして茶山は意識的に宋詩風に転換したのであろうか。詩文における盛唐擬古主義からの脱離は、儒学における古文辞学から朱子学への転換と同時になされたわけではない。詩文に堪能な儒者においても、思想の方がいち早く旧風刷新を果たし、詩文がそれに遅れて変化するというケースは多くみられるようである。さらに、唐風崇拝への抵抗として宋詩が志向されたわけでは必ずしもなく、新風を求めて多岐にわたる摸索が諸詩人によってなされていた。那波魯堂の門下、茶山と親しんだ西山拙斎が朱子学に転じたのは明和元年（1764）頃であるが、当時彼の詩風は依然古文辞風に留まっていた。やがて新詩風を求める兆しが現れ始めた頃、西山拙斎が奉じたのは宋詩風ではなく、中唐の白居易だった。

同様のことは、明和五年（1768）頃朱子学に転じた頼春水にも見られる。当時、春水の詩はまだ唐詩風を尊いものとしていた。その安永六年（1777）の書簡に次のようにいう。

> 亀井詩文之評、彼が文はいやはや面白キ事何分ニも伎養すくれたる事也。詩文位ノ卑キ様とハ甚以アシキ見様也。我輩よりして藪なとハ達意が主に候へハ位置も自然ト卑ク注解の様ニ成申候。彼ハ高キ所より見降して書キ、我ハ秦漢以上の人トシテ書キ申候故。先便脩辞の文ヲ遣候、詩もさ様ニ見え候。意を主トセズ。気ヲ主トス。比喩ハ比項方頻ニ申候。比喩訓辞ノ初巻ニ李杜ヲ評して有之候。（安永六年六月十八日付　頼春風宛頼春水書簡）

「亀井」は筑前の亀井南冥、徂徠学を奉ずる儒者である。この書簡に見られるように、春水は朱子学転向後も依然として秦漢盛唐を摸倣する作風を尊重する。すなわち、当時混沌社の漢詩創作は意識的に宋詩風に転換したとはいえない。茶山は春水らとやや違って、混沌社の明文人趣味を享受することでもたされた漢詩への再論は、南宗画にユニークな景色形容技法を吸収し、後に現れた「写実的な宋詩風」の興起に繋がった。

無論、茶山はこの賑やかな交遊中、明文人の文雅や絵画的な表現方法を学び、晩年の田園詩にも見えるように、江南の風景に思いを馳せ、夕映えの漁村や鴉などを歌うのも、南宗画世界と重ねると容易に納得される。例えば、以下の

> 漁村[26]

26）『黄葉夕陽村舎詩』前編巻六に所収、五十歳代の作品。

舍南晒漁網　　舍南　漁網を晒し、
舍北繫漁舟　　舍北　漁舟を繫ぐ。
漁叟蔭楊柳　　漁叟　楊柳の蔭、
呼童敲釣鈎　　童を呼びて　釣鈎を敲く。

から伺えるように、漁村の田園風景を記し、生き生きとした漁村の人情生態を目の前に現れたように描いた。

以上分析したように、茶山は青年時の遊学を通じて、池大雅や混沌社の交遊などによって詩風の転換を果たした。彼はまだ完全に宋詩風に転換していないが、明文人文化の受容が持たされた新たな作詩技法は彼の田園風景詩に大きな影響を与えたと考えられる。

五　世情を批判する詩風について

以上遊学時期の事情を踏まえて、茶山の田園詩詩風の転換につき考察を試みた。次に、遊学期に見られる茶山の世情批判の詩風をめぐって考察してみよう。茶山の遊学期に作られた詩作には、風景を詠ずる雑詩と交遊の事情を記述した漢詩の他に、少年時の不安と悲調を帯びたものがある。たとえば、次の一首がそうである。これは肥後藩儒の藪孤山に寄せた二首の詩のうちの第二首である。

寄肥後藪先生　其二[27]
我本農家子　生長事躬耕　　我れ本農家の子、生長して躬耕を事とす。
一朝改舊業　追師學聖經　　一朝旧業を改め、師を追うて聖經を学ぶ。
聖經豈易學　駑駘苦脩程　　聖經豈学ぶに易からんや、駑駘脩程に苦しむ。
中間罹疾病　形迹乖素誠　　中間に疾病に罹り、形迹素誠に乖く。
青年如流水　蹉跎何所成　　青年流水の如く、蹉跎何の成す所ぞ。
隴畝漸就荒　詩書未能明　　隴畝は漸く荒に就き、詩書未だ明なること能はず。
思之心自愧　輾轉徹鷄鳴　　之れを思うて心自ら愧ぢ、輾轉して鷄鳴に徹す。
洲上杜衡草　隔岸揚芳馨　　洲上の杜衡草、岸を隔てて芳馨を揚ぐ。
欲採臨渡口　秋水淼盈盈　　採らんと欲して渡口に臨めば、秋水淼として盈盈たり。

農家という旧業を改めて「聖經」を学ぶようになった茶山は、自らの青年時の求学における彷徨心を詠む。田畑は荒れはじめるが、詩書の学問世就の理想はまだはるか遠くなる。現実と理想の違いに心が揺れているのがありありと伝わってくる。理想を求める青年茶山はとまどいながら、学問の道を歩み続ける。このような遊学前期に見える青年の不安と理想に迷う詩風は政治批判の詩風とどのように繫がるのだろうか。

27)『黄葉夕陽村舍詩』前編巻一に所収。

茶山は遊学期の前半は表現や語句に凝って繊細で綺麗な詩を作っているが、遊学期の後半に入ると、世情を批判する作を作り始めている。つまり、この詩風転換も遊学期にあったと考えられるのであり、以下、具体的に検討してみる。

天明二年（1782）以前の作を収めた『村舎詩』前編巻一の計百八首の古今体詩のうち、数的には無視できないのは世情を批判する詩である。これらの詩は他の詩作に見られない疎外感、無能感に満ちた詩ともいえる[28]。『村舎詩』前編巻一の詩は、京都遊学時期に作られたとされている。その中から世情を批判する詩を抜き出すと、次のようなものが挙げられる。すなわち「閑谷」「有鳥三首　有感而作」「御領山大石歌」「秋半　六首」「耕牛」「龍盤」「秋居」「時情」「偶作　二首」である。茶山の政治批判詩を考察した先行研究はいくつかあるが[29]、ここでは茶山の遊学経歴に着目して検討する。

茶山の世情批判詩から帰郷後（天明元年）（1781）の政治批判詩までの心境の変遷といえば、西山拙斎を提起しなければならない。明和八年（1771）二十四歳の時、茶山は西山拙斎と初めて出会い、それは茶山が三回目の遊学を終えて神辺に帰っていた時であった。その時、拙斎は茶山に古文辞学の否を説き、朱子学へ転じること勧めたのであった。安永九年（1780）の最後の遊学期には、茶山はほとんど拙斎とともに行動し、多くの面で影響を受けた。注意されるのは、拙斎が「述感篇」[30]と題して五言絶句百三十篇を詠み、当時の政治や社会事情に対する感想や批判を吐露していることである。その跋文で拙斎は次のように述べている。

> 右述感詩、百三十章、起自丁未八月、迄於康戌正月。其間、美刺参半、瑜瑕不掩、務記時事之實、不問格調如何。（中略）夫諫鼓謫木、見於唐虞之際、瞍賦矇誦。酌於三王之世。野人放言、奚為昭代之累哉。若夫僭狂之誚、風缶之嗤、固所不辞也。観者其察諸。

ここで拙斎は「朝鼓を備えたことは理想の世といわれる唐虞の際に現れている。盲人が詩作を作り諳んじることは、三王の時代に見られた。田舎者の無責任な言葉など、どうして太平の世の迷惑になろうか。もしそれが僭狂の誹り、風缶の嗤いを受けたとしても、もとより弁解はしない。この詩を読む人はこれらのことを察してほしい」と記す。このような世情批判の志向のもとに書いた意図を理解してほしいという強い願望がここにある。いったい、拙斎の影響を受けた茶山は『村舎詩』前編巻一の作品でそれに応えたのであろうか。

「亦太露頻」と六如が評した「偶作　二首」を取り上げる。

偶作　二首

季秋龍未見　　季秋　未だ龍見ず

28）注３前掲　小財陽平「天明年間の菅茶山とその詩風」を参照（『明治大学教養論集』500号2014年）。

29）小財陽平「菅茶山の政治批判詩―「忌諱に触れる」作品をめぐって―」西原千代「菅茶山の政治批判詩について」などがある。

30）西山拙齋『西山拙齋全集』（廣常人世編、浅口市、2006年）

荒野正西成　　荒野　正に西に成らんとす
魯国爲長府　　魯国　長府を為して
徭夫犯曉行　　徭夫　曉行を犯す
新政何多事　　新政　何ぞ事多からん
中宵始放衙　　中宵　始めて放衙す
干旄城外至　　干旄　城外に至りて
不識自誰家　　識らずや 誰が家よりぞや

一首目は農家の忙しい時期に徭役に駆り出す農民たちに同情して暴政批判した作であり、中には『論語』（先進篇）の「魯人爲長府」の典故を用い、節約を主張し民力を惜しむべしとする孔子の主張を引用する。二首目は城中で仕事を済ませた家老は、藩中の事柄のについて、いちいち伺いを立てるために、新参者の猾吏のもとに行かなければならない、そのことへの憤懣である。茶山は横暴な為政者が私腹を肥やし、民力を酷使する政治に対して憤慨を禁じ得なかった。

しかし、遊学期に作ったこれらの世情批判詩は婉曲な表現を多く用い、「不識自誰家」といったぼかした表現が見られる。その後、遊学を終えた茶山は神辺に帰って塾を経営し、そこで暮らすことになった。当時自然災害に加え、藩の無能や暴政が一層ひどくなると、茶山はその怒りを露わに詩作に込めた。それは、遊学期のものとは比較にならないほど厳しいものであったため、刊本には載せられていない。だが、以上に述べたように、茶山遊学期に見えた疎外感を帯びた、世情を批判する詩風は西山拙斎などの人物との交遊によって形成されたものと思われ、それがのちに、茶山の成長とともに明確な形をとったものといえよう。

おわりに

本稿では、菅茶山青年時の六回の京都遊学の経歴をふまえ、この時期における茶山の詩風の転換について検討した。茶山は最初古文辞学を学ぶことを目的として遊学を始めたが、四回目の上洛からは朱子学に転向し、師も市川某（鶴明）から那波魯堂に変わった。そして、最後の六回目の遊学は頼春水を介した浪華混沌社との賑やかな交遊が重ねられた。茶山は混沌社友の厚意により連日連夜詩酒徴逐の会に招かれ、この上ない歓待を受けていた。その様子は茶山の自筆日記『第二・北上日記』に生き生き描かれているとおりで、その豊かな遊学と経験が茶山の詩風の転換に作用した。

まずは風景田園詩の詩風転換である。茶山二十代の作と思われる「花月吟」二十首は「以纖靡似時様、棄而不録」と自評されるが、厳しいすぎる見方のように見られる。詩語の選択に繊細すぎる感じはあるものの、単に観念上で作られたものではなく、おそらく南宗画を大成した池大雅、明代文人の詩作に新たな美的意識を見出した浪華混沌社からの影響であろう。すなわち、混沌社の明文人の趣味を享受することによって惹き起こされた詩興は、南宗画のユニークな景色形容技法とあいまって茶山を刺激し、後に現れる茶山の「写実的な宋詩風」の興起に繋がることになったと思われる。

次に茶山の詩集前編巻一に見える、疎外感・無能感に満ちた諸詩によってその政治批判詩の詩風転換

につき考察した。遊学を始めたときの不安感ととまどい、理想への追求がそこにありありと表現されていて印象的である。こうした詩風は「述感篇」を作って政治、社会への批判を表現した西山拙斎の影響が大きいと思われる。こうした批判意識が茶山を駆りたて、「偶作　二首」をはじめとする『村舎詩』前編巻一のような世情批判詩が作られた。これは憂国憂民詩人としての茶山の始まりともいえよう。

以上のように、本稿では、茶山遊学期において二種類の詩風転換が並行して生じていたことを考察したが、遊学を終えて神辺に帰った後の詩風転換については今後の課題としたい。